

雪氷研究大会 (2010・仙台) の開催報告

1. 全体概要

雪氷研究大会 (2010・仙台) は、東京エレクトロンホール宮城 (宮城県民会館) を中心に、(社)日本雪氷学会 (以下、雪氷学会とする)、日本雪工学会 (以下、雪工学会とする) の主催により、2010 年 9 月 26 日 (日) から 9 月 29 日 (水) まで開催された。

秋田大会から 4 年ぶりの東北地方開催である。昨年の札幌大会に続き、研究発表において両学会の発表カテゴリを完全に合同化した形で実施した。共同開催がすっかり定着してきたといえる。

プログラムは研究発表 (口頭・ポスター) を中心に企画セッション、分科会セッション、雪氷楽会 (日本雪氷学会主催)、市民向け公開シンポジウム (日本雪工学会・建物の環境研究委員会主催)、懇親会、各種会合 (委員会・分科会総会等) で構成した。雪氷楽会はせんだいメディアテークで、懇親会は仙台市民会館で開催した。

大会参加者 (登録者) は約 400 名であった。

大会実行委員会は、沼野夏生 (東北工業大学) を委員長とし東北地区の大学、研究所、企業等から計 32 名で構成した。東北地区は会員数が少ないこともあり、比較的少人数で実行委員会を組織することとなった。マンパワーも勘案し、コンパクトで参加者が参加しやすい大会を目指した。なお、大会に関するアンケート調査の報告は別稿として掲載されるので、参照されたい。

2. 開会式

9 月 27 日 (月)、あいにくの雨模様であったが、初日受付の混雑もほとんどなく、開会式を迎えることができた。沼野実行委員長があいさつを行い、歓迎の意、大会概要の説明、関係各位への感謝などが述べられた。

3. 研究発表

研究発表申込件数は 228 件で、昨年よりやや減少した。口頭とポスターそれぞれ同数の 114 件として実施した。

3.1 口頭発表

口頭発表は 15 のセッションで行われた。

各セッションは 6~11 件の発表とした。1 件あたりの発表時間は 12 分 (発表 9 分、質疑応答 3 分)、3 会場同時進行を基本として設定した。なるべく関連分野は同時開催しないように心掛けたが、聞きたい発表が重なっていたこともあったかと思われる。

会場は東京エレクトロンホール宮城の 3 つの会議室、A (200 名)、B (100 名)、C (100 名) を用いた。A 会場は大変大きく、マイクの音量を大きくすると隣接する B 会場に音漏れが生じた。また、初日は備え付けのプロジェクタの発色がよくなかったことと、スクリーンが小さく後ろの席からは見にくい難点があった。C 会場は、部屋の中に大きな柱があったため実質的には 60 名程度の収容力で時おり座席が不足した。

今回は発表用の PC は発表者各自に持参してもらう形とした。切替器の設置と補助員の配置により、おおむね順調に発表を実施できた。USB メモリ経由のウィルス感染や、ファイルの文字化けなどを防ぐことができたと考えられる。

3.2 ポスター発表

ポスター発表は 9 月 27 日 (月) 午前・午後と 28 日 (火) 午前の 3 部に分けて、E 会場 (5 階展示



図 1 口頭発表会場の様子

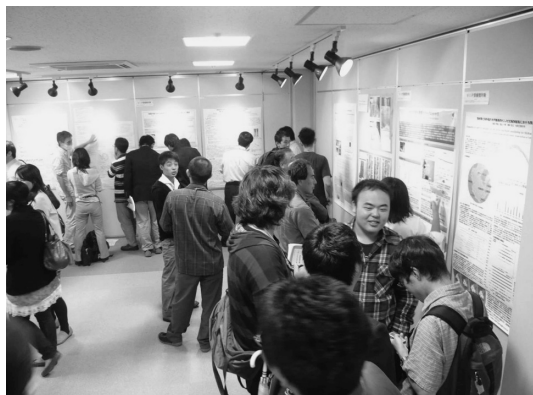


図 2 ポスター発表会場の様子

室)にて実施した。張り出し時間は2時間半で、そのうち口頭発表のない1時間をコアタイムとした。3部に分けたことにより、同時張り出し枚数が減り、聞きたいポスターを聞きやすくなったことと、発表空間の確保ができたと考えられる。

ポスターは縦長 A0 サイズのスペースとした。会場の決まりでポスターの固定は事務局が用意した虫ピンで行うこととしたが、張り替えはおおむねスムーズに行われた。

4. VIP 賞と学生奨励賞

4.1 VIP 賞

VIP 賞 (Very Impressive Presentation 賞) は「遊び心を持ちつつ、若手会員の奮起を促し、全国大会を楽しく盛り上げる」ということを目的に樋口敬二雪氷学会名誉会員の寄付により行われている賞で、今回で8回目となった。今回の対象者はポスター発表を行う概ね 35 歳以下の両学会会員で、24 名のエントリーがあった。9 名の審査委員による選考の結果、次の最優秀賞 1 名、優秀賞 3 名が表彰された。

最優秀賞：勝島隆史 (長岡技術科学大学)「積雪中の水みちの数値計算と感度実験」

優秀賞：島村 誠 (北海道大学大学院環境科学学院)「防風・防雪林の効果に関する野外観測」

優秀賞：島田利元 (千葉大学大学院理学研究科)「MODIS 衛星データによる南極氷床表面温度と自動気象観測装置 AWS データとの比較研究」

優秀賞：野村大樹 (国立極地研究所)「海水表面から大気への硫化ジメチルの放出について」

受賞者の発表と授賞式は懇親会において行われた。受賞者には賞状・賞牌のほか、副賞として全員に仙台ガラスの洋酒グラス・ぐい飲みが、最優秀賞には加えて鳴子こけしと仙台手ぬぐいが贈られた。

4.2 学生奨励賞

札幌大会に引き続き、大会実行委員会から口頭発表の学生・大学院生を対象に学生奨励賞を授与した。投稿された講演要旨の内容による研究の独創性、論理性、明瞭性および発展性などに加えて、口頭発表の表現力、説得力を総合的に審査し選考した。その結果、次の 3 名が選ばれた。

津滝 俊 (北海道大学大学院環境科学院)「スイスアルプスローヌ氷河における氷河前縁湖形成後の流動変化」

荒川 雅 (東京大学/日本原子力研究開発機構)「強誘電性氷の生成を促すメモリー効果の発見」

大風 翼 (東北大学大学院工学研究科)「建物周辺の非平衡流中の飛雪現象のモデル化 (その 7) —2 つの飛雪空間密度の輸送方程式による新たな飛雪モデルの提案—」

授賞式は大会最終日に行われ、受賞者には賞状のほか、副賞として鳴子こけしと仙台手ぬぐいが贈られた。

5. 企画セッション

企画セッションは、登録参加者以外の方も聴講可能なオーガナイズドセッションである。今大会では 6 件のセッションが企画された。そのテーマは、道路凍結防止剤、雪結晶、雪と建築、国内外の研究推進体制、ムベンバ現象 (湯と水凍結逆転)、実験シミュレーションと様々な分野に及んだ。

6. 分科会セッション

本大会では、雪氷学会の 9 分科会と氷河情報センターの分科会セッションが開催された (気象水文分科会と衛星観測分科会は合同セッション)。9 月 27 日夕刻には 3 つの分科会が並列開催されたが、参加者が重複する分科会セッションは異なる時間帯で開催することに配慮した。各セッションの参加者は 20~50 名程、総数で 300 名程の参加があった。

7. 技術展示

本大会では、メーカーや商社、建設会社等 13 件の技術展示があり、研究成果や気象測器等について紹介が行われた(図 3)。展示場所は受付、ポスター会場と同じ E 会場(5 階展示室)とし、多くの参加者に技術展示を見てもらうよう配慮した。今回は難しかったが、休憩スペースと一緒にするなどの工夫をすれば、さらに賑わったのではないだろうか。

8. 各種会合

各種会合は、雪氷学会関連として授賞式や委員会等の 13 会合、雪工学会関連として受賞記念講演や委員会等の 5 会合が開催された。

9. 懇親会

9 月 28 日(火)に仙台市民会館地下展示室において開催し、参加者は約 260 名であった。実行委

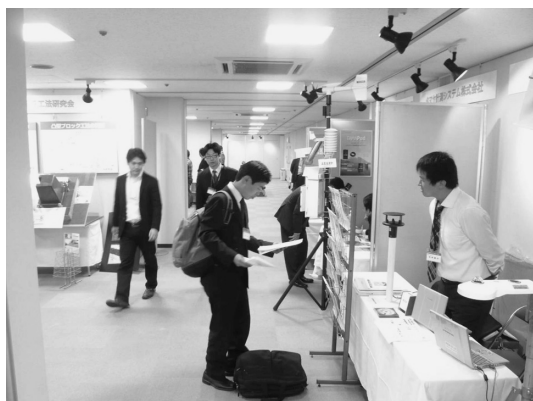


図 3 技術展示



図 4 懇親会にて、年齢差 80 才?

員長のあいさつ、両学会長の祝辞、乾杯、懇談に続いて、両学会の学会賞受賞者の紹介、VIP 賞の発表と授賞式が行われた。

懇親会は主会場から近くアクセスしやすい場所とし、予算は抑えつつも料理・飲み物が十分あり、地元らしさをアピールできることを目指した。花などの装飾品は取りやめ、横断幕は手作りとした。牛タン焼、笹かま、芋煮、地酒などが好評で、参加者に満足いただけたものと思う。

10. 雪氷楽会

平成 22 年度科学研究費補助金(研究成果公開促進費)「研究成果公开发表(B)」補助事業として、「雪氷楽会 in SENDAI~雪と氷で遊ぼう~」を大会初日 9 月 26 日(日)に仙台メディアテークで開催した。参加者は約 300 名であった。仙台のメインストリートの一つである定禅寺通りの開放的な建物 1 階のオープンスペースで行ったため、予定なしで立ち寄った親子連れも多かったようである。

19 のブースで雪や氷に関する実験、工作、観察、展示などが行われた。出展者の工夫に加えてボランティアの学生などの協力を得て大変盛況となった。「雪結晶の万華鏡」、「アイロンビーズで雪結晶のアクセサリをつくろう」などのコーナーが人気であった。

雪氷楽会に関する詳しい報告は本稿とは別に「雪氷」に掲載されるので、そちらをご覧ください。

11. 公開シンポジウム

大会初日 9 月 26 日(日)に東京エレクトロンホール宮城 A 会場で「積雪寒冷地の住まいにひそむ生活環境上の危険を考える」と題して市民向け公開シンポジウムを実施した。一般市民、建設関係者、住宅関係者、学生等 57 名が参加した。

シンポジウムでは、住まいに潜む危険の一つである「寒さ」に関して、栃原 裕氏(九州大学)と長谷川兼一氏(秋田県立大学)に講演いただいた。引き続き講演者を交えてディスカッションを行った。

12. その他(託児所)

参加者の便宜を図るため、託児施設の紹介と費

用の補助を行った。今回は 3 件の申し込みがあった。小さな子どもを持たれる学会員の大会参加の一助となったのではと考えたい (図 4)。

13. おわりに

大会の準備・開催にあたり、ご迷惑、ご不便をおかけしたこともあったかと思われませんが、どうか無事大会を終えることができました。ご協力いただいた関係各位、参加者の皆様にお礼を申し上げます。

宮城県、宮城県教育委員会、仙台市、仙台市教育委員会、河北新報社、NHK 仙台放送局、TBC 東北放送、仙台放送、ミヤギテレビ、KHB 東日本放送から後援をいただきました。また、広告掲載、技術展示など多くの企業、団体にご協力いただき

ました。

なお、本大会についての問い合わせは、以下の事務局までお願いします。

【大会事務局】

東北大学大学院理学研究科 山崎 剛

Tel. 022-795-5781 Fax 022-795-7758

E-mail : yamaz@wind.gp.tohoku.ac.jp

14. 次回開催地

次年度開催地は長岡が予定されており、大会実行委員長佐藤篤司氏（防災科学技術研究所）の下、準備が進められている。

（東北大学 山崎 剛）

（2010 年 11 月 26 日受付）